

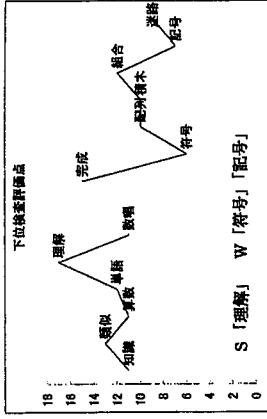
書字が苦手な児童のひらがな指導

～Aくんの指導事例から～

○盛弓子^① 北村直子^② 坂尻千恵^③ 平井理心^④ 小野村哲^⑤
 (1) NPO法人リゾルヴ学校教育研究所 (2) 筑波大学大学院 (3) 放送大学大学院

はじめに

当研究所が運営するライズ学園に通い始めた当時のA君は、劣等感のためか鉛筆やペンを持とうとしなかった。通園後、ライズ学園の様々な活動の中で、A君は次第に自信を取り戻していった。自ら書字練習の意思を示し、小学1年生程度の漢字やひらがなの書き取り練習を始めた。しかし、特にひらがなの書字については「かたちが思い出せない」「読めるけど書けない」と、悲憤な口調で訴えた。このことをきっかけに、当研究所では、書字が苦手な児童に対して、楽しみながらかつ効果的な練習方法の開発に取り組み始めた。ここでは、その原案を指導教材として用いたA君の学習の様子について報告したい。



I. Aくんのプロフィール
 初対面時は小学3年生。現在、小学6年生。
 小学1年生の中盤から不登校となった。
 書字困難がその背景にあったと考えられる。
 左利き。WISC-III (平成12年3月実施)
 FIQ 112; VIQ 118; PIQ 104

II. Aくんのひらがな書字習得学習指導の過程

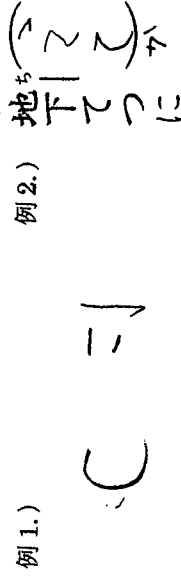
(1) 『ひらがなれんしゅうちょう』の原案を使用するまでの書字練習

書いて消せるノートへの自由画や迷路遊びなどを経て、A君は自ら書字練習の意思を伝え、1年生レベルのひらがなと漢字を、手本を見ながら書写していく方法をとった。思うように書けないという自分自身へのもどかしさからか、書字への不安はぬぐいきれなかつた。

書字の特徴と学習の様子

手本を見ないで「あ」～「ん」まで書く課題では、46文字のうち19文字は正しく書けた。その他3文字について鏡文字があった。残り24文字は「思い出せない」と言い空欄。

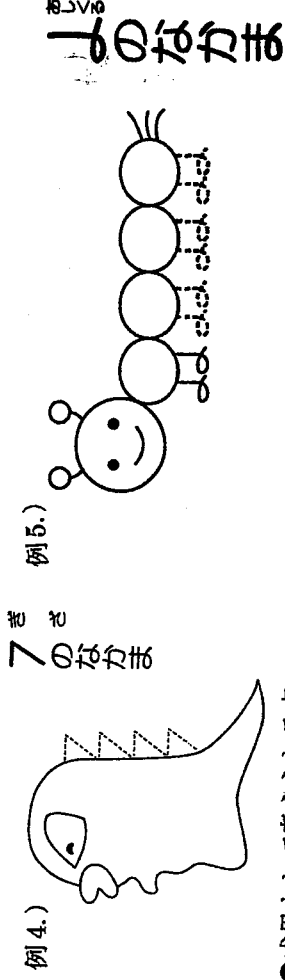
- ① 手本から目を離れた途端に「どう書くんだっけ？」と不安げに聞く。例1.) 「つ」「に」
- ② 「く」「つ」「け」「に」などで鏡文字になることが多かった。例1.) 「つ」「に」
- ③ 正しく読み上げながらも、目に付いた別の文字を書き込んでしまったり「て」を書く。例2.) 「ちかてつ」「か」と言いながら「て」を書く
- ④ バランスの悪さと迷い筆が目立った。例3.) 「えん」「がんねん」



(2) 『ひらがなれんしゅうちょう』の原案を用いてからの書字練習

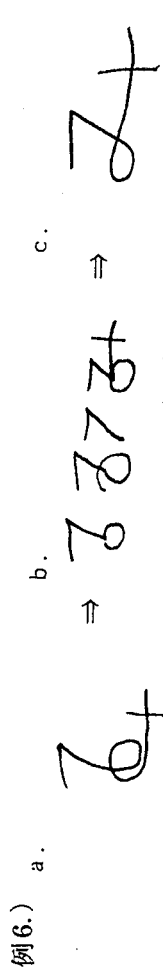
A君を共同開発者として、以下の3点を目的に『ひらがなれんしゅうちょう』の作成に取り組んだ。

- 1. 類似したパーツごとに文字をグループ化する
- 2. 絵の中にパーツを入れ込み、方向性や形を印象づけられるようにする。例4.) 「ぎざ」
- 3. 類似部分に名前をつけ、文字の形を言葉で説明できるようにする。例5.) 「あしくる」



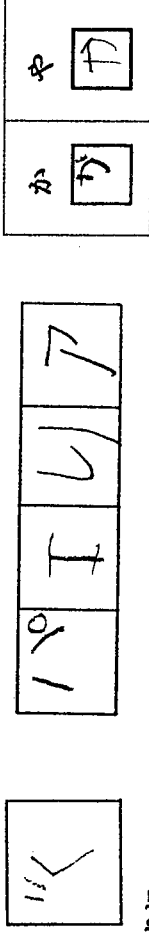
●成果として考えられる点

- ① 「み」には「ぎざ」と「あしくる」が入っているね」等、自由な感想を話しながら、書字を楽しむようになった
- ② 「ぎざ」と「あしくる」のなかま「ぎざ」書いて、続けて「あしくる」そのままのぼして」など、耳からヒントを取り入れることで全体的な形を想起しやすくなった。
- ③ 注意の散漫や不安げな迷い筆ではなく「正しいかたちを書くぞ」という意欲と「間違っても大丈夫」という自信が見られるようになった。例6.) 「み」



●今後の書字学習の課題として

- ① 「く」の鏡文字や、濁点を左側に書くなどの誤字が、現在も見られる。例7.) 「ぐ」
- ② 「り」と「り」等、ひらがなとカタカナの書き分けが難しい。例8.) 「パエリア」
- ③ 「か」と「や」、「い」と「り」等の書き分けが難しい。例9.) 「か」と「や」



おわりに

高学年のA君にとっては、ひらがな書字のみを繰り返し練習することには、抵抗が大きい。そのため現在は、この練習帳を使用せずに、難読熟語のふりがなをふる、等の方法で練習を継続している。この練習帳が小学1年生や就学前の子どもの練習に、どれほど有効であるかはまだわからない。しかし、もしもA君がもう少し早い段階でこの練習帳を使っていたとしたらと、考える。ひらがなの習得が望まれる就学前後の段階で、劣等感を抱えている子ども達は少なくない。A君との試行錯誤を今後に生かし、より効果的な支援方法の開発に努めていきたい。